

● **ともいき講座・まちづくりミーティング「薬物依存って何だろう？」**

薬物依存の本人と家族の話を聴き、当事者・学生・市民・専門職が共に考えました



ともいき研究「精神障がい者の家族(ケアラー)への情報提供と支援に関する実践的研究」では、11/23(月・祝)に「薬物依存って何だろう？」と題した、ともいき講座・京都府南部地域まちづくりミーティングを実施しました。司会は木津川ダルク施設長の加藤武士さんと研究代表者の松田美枝(本学臨床心理学部教育福祉心理学科講師)が務め、初めにアディクト(依存症者)として登壇することを讀んで名前を呼ぶウォーミングアップを会場全体で行いました。その後、加藤さんによる木津川ダルク紹介と薬物依存についてのお話、そして本人と家族の体験談に耳を傾けました。薬物依存から回復し続けることは生きることそのものであるというお話が印象的で、それは私たちノンアディクト(非依存症者)にも通じることではないかと感じました。さらに、アディクトとノンアディクトが混ざりあってグループワークを行い、薬物依存とその回復について、ディスカッションを通して理解を深めました。100名の参加者のうちアディクトが4割を占める会場で、薬物依存について生で話を聴くことができ、大学がともいきの拠点として機能しているのを実感しました。

イベント開催のお知らせ

**<2015年度 秋学期> プロジェクト科目
合同成果発表会**

- 日時: 2016年1月16日(土)
①12:30~15:45(予定) / ②13:30~15:50(予定)
- 会場: 京都文教大学 ①14号館 14101教室 / ②14号館 14201教室
- お問い合わせ: 京都文教大学フィールドリサーチオフィス

- ①地域に根ざした内容を扱った科目「プロジェクト科目(地域)」
 - ②様々なテーマに基づいた科目「プロジェクト科目(テーマ)」
- に分かれ、半期間の学びをクラス毎に発表します。



地域連携学生プロジェクト2015 成果報告会

地域に根ざし、地域に学び、地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取組を募集し、支援しています。今年度採択された「宇治☆茶レンジャー」商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas「響け!元気に応援プロジェクト」京都文教大学バスツアーズ」の4団体が活動の成果と課題を報告します。

- 日時: 2016年2月17日(水) 10:00~12:00
- 会場: 京都文教大学 弘誓館G 104教室(予定)
- お問い合わせ: 京都文教大学フィールドリサーチオフィス
- 日時: 2016年2月17日(水) 13:00~16:00
- 会場: 京都文教大学 14号館14102教室・14201教室・14202教室他(予定)
- お問い合わせ: 京都文教大学フィールドリサーチオフィス

**ともいき研究成果報告会
京都府南部地域まちづくりミーティング**

【ともいき研究成果報告会】

地域における本学の教育、研究、社会貢献活動を一体化し、その成果を本学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを目的に2014年度からスタートした、「ともいき研究(地域志向協働研究/地域志向教育研究 ともいき研究助成事業)」学内・学外から広く募集を行い、今年度採択された21プロジェクトの研究成果を報告します。

【京都府南部地域まちづくりミーティング】

地域のみなさんや行政、企業、商店街、教職員・学生が、地域の課題やニーズを共有し、課題解決へ向けた連携・協働を促進するためのミーティングを開きます。京都府南部地域(宇治市以南)に本拠を置く唯一の大学として、地域全体で学生、教職員、地域住民が共に学び、生かし合う「ともいき(共生)キャンパス」を創造し、地域で学び、地域に貢献できる人材を育成し、地域課題に取り組む方策を協働で考えることを目指します。



京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニューズレター **ともいき** TOMOIKI vol.5
2016年1月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



ともいき人材の育成—「地域志向」教育の推進

地域協働研究教育センター長：森正美

「地域志向」を高める。このCOC事業必須の命題は、単に学生を地域で活動させる、教員が地域課題について研究する、さらには大学の責任として地域貢献的な活動をすればいいということではありません。大学におけるアクティブ・ラーニングの手法であるPBL型学習同様に、現場から地域課題を発見し、探求し、多様な地域主体が力を合わせてチームで課題解決をめざすという総合的なプロセスが必要となります。

その中で特に地域志向教育に求められるのは、「地域」の重要性を認識し、地域を切り口に普遍的なテーマや課題についても学ぶことのできるきっかけと機会を学生たちに与えることです。地域について学ぶことは、

- 1) 学生に具体的な生活課題と学問的テーマの関係性についての気づきを促し
- 2) その結果として主体的学びの意欲を喚起し
- 3) 学んだことを活かして生きていくという将来実感を伴う学習への動機付けを得る

ために、大変有意義です。

1年次の全学必修である新設科目「地域入門」では、上記のような学びの動機付けを主目的としています。詳細はP3-4の活動報告に譲りますが、学生たちにとってCOC認定校で学ぶ意義が少しずつ浸透してきていることを実感しています。また、2年次以降に履修可能な現場実践教育科目(下表参照)の中から地域志向科目として設定している「プロジェクト科目(地域)」「地域ボランティア演習」「地域インターンシップ」の紹介や、上級生や地域で働く卒業生の正課・課外での学習体験などを知ることで、卒業後の地域での活動を視野に入れた段階的学びへの意識付けも図ろうとしています。その教育の過程には、多くの地域主体が関与してくださっています。

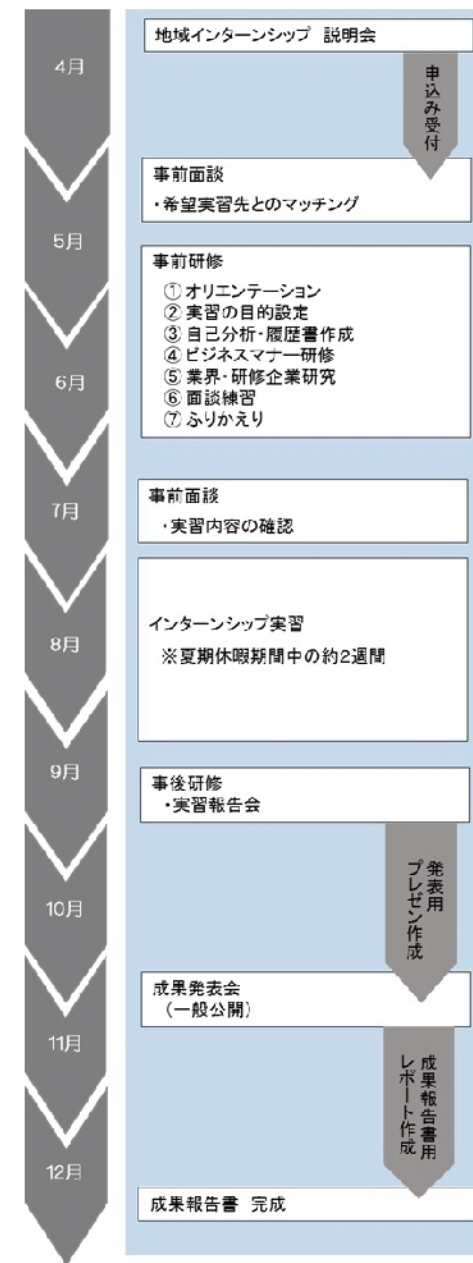
専攻の違う学生たちの卒業までの学びにいかに関わり地域志向を浸透させていくかなども含め、新カリキュラムの初年度ゆえに手探りの部分も多いですが、教職協働で、SA・受講生・地域からのフィードバックも生かしながら、さらなる充実を図っていきたく考えています。

ともいき人材の育成



地域密着型プログラムが始動 地域インターンシップ(課外プログラム)

◆インターンシップの流れ



2015年度 地域インターンシップを振り返って

総合社会学部 准教授：片山明久

今年度の「地域インターンシップ」は、次年度から全学部に対する正課化に向けて、昨年度よりも実習先を件数、職種共に拡充して実施し、17名の学生が参加しました。

プログラムとしては4月のエントリーに始まり、以降4つのパートで構成しました。第1は、事前研修です。ここではインターンシップの目標設定(「マニフェスト」の作成)、企業・業界研究、ビジネスマナー研修等を、主にグループ別のワークショップ形式で行いました。3名の担当教員が各々のグループにつき、学びを個々にフォローしていきました。第2に、研修先とのマッチングです。エントリーシートと事前研修期間中に行った面談、そして研修先からの希望票をもとに、マッチングを行っていきました。また研修前には、学生自らが研修先にアポイントを取り、あいさつに行くことも行ってもらいました。第3は、インターンシップ実習です。実習期間中は、担当教員が常に学生や研修先からの連絡に備えると共に、全研修先に対して中間訪問を実施し、学生と実習先がうまくマッチできるように細かな調整を行いました。第4は、事後学習です。インターンシップ終了後の振り返りの後、実習で得た成果を発表する「成果発表会」を開催しました。「成果発表会」には、ご多用の中多数の実習先様にもご来場いただきました。現在は総括として、成果報告書の作成に入っています。

「地域インターンシップ」を通して、学生たちは大きく成長しました。責任感、自信、礼儀、他者への気遣いなど、実習前とは比べ物にならないほどの向上を見ることができ、また何よりも、自分の将来にしっかりと立ち向かおうという意志が生まれてきたようです。

2016年度は、今年度よりもさらに実習先の数も増やし、また職種としても、福祉・教育など幅広い分野に広げる予定です。このような計画ができますのも、様々な実習先様のご協力によるものと理解しております。未筆ながら、全ての実習先様に感謝申し上げます。

参加学生の声

総合社会学部3年生：川崎健太 実習先：株式会社アースワーク様

関心を持つ広告業界が、地域ではどのような仕事をしているのか。私は大きな興味を持って、地元の広告会社様で実習をさせていただきました。実習では、同社出版物の構成を立案しプレゼンを行うことや、営業への同行などを行いました。これらの体験によって業界の仕事の流れの理解ができましたが、何よりもこれらの体験は、仕事を通して知的好奇心が刺激され、働くことに喜びを見つげられた貴重な機会になりました。



◆本学の現場実践教育科目(2015年度入学学生)

授業科目名	単位数	区分	履修年次	
全学共通科目 現場実践教育科目	2単位	選択必修(※)	地域ボランティア演習	2~
			プロジェクト科目(地域)	2~
			プロジェクト科目(テーマ)	2~
			インターンシップ	2~
			地域インターンシップ	2~
			海外インターンシップ	2~
ボランティア論			3~	

(※臨床心理学部教育福祉心理学科を除く)

地域との出会い、地域に学び地域で成長する 全学共通科目 地域入門 (1単位・1年次必修)



「地域入門」は、2015年度秋学期より開講されることになった1年次生全学必修の授業で、京都文教大学の学生が卒業までに身につけるべき能力「KBU学士力」の基礎を養成する科目として位置づけています。この授業の特徴として、複数の教職員と上回生の授業補助者(SA=スチューデント・アシスタント)との教職によるチームティーチング、授業時間内にふんだんに組み込まれた個人ワークやグループワーク、そして学生が毎回授業時間内に記入し、提出するワークシートを教職員、SAの連携で整理、採点、返却し、学生へのフィードバックを行っていることが挙げられます。この授業は、京都文教大学での学びにおいて、地域で学び、地域に役立つ視点と、その学習活動の主たるフィールドとなる宇治市

地域協働研究教育センター専任研究員 滋野浩毅

や京都市伏見区を例に地域の実情を知ること、また地域課題に関心を持ち、それらの課題が一人一人にとって「自分事」であることを学ぶことを目的としています。

少子高齢化、人口減少、産業構造の変化等に直面している現代の日本社会において、地域は多くの課題を抱えています。現在、国主導で「地方創生」が進められていますが、大切なのは課題の最も近くにいる住民や自治体がその解決にあたることです。そのためには、地域で課題解決にあたることのできる人材の層を厚くしていく必要があります。地域において、大学に求められる役割はますます大きくなってきています。

【「地域入門」全8回の授業内容と受講生のコメント】

第1回授業(9月25日)

「地域入門」で学ぶ目的

「地域」とは何か?を学習し、現在の日本社会の課題、地方の課題について確認しました。また、本学が「地の拠点、知の拠点」として目指すこと、本学の学生が本学と「地域」での活動を通じて学ぶことについて再確認しました。

第3回授業(10月16日)

ゲスト講義(京都府山城広域振興局、京都市伏見区役所)

今まで学んだ「地域課題」について、本学に隣接する2つの地域からゲストをお招きし、それぞれの地域の現状と課題をお話いただきました。また、受講生は「どんな地域だったら訪れたいのか、住みたいのか?」を考えました。

●受講生コメント●

観光として売り出している所が少ない地と、観光名所があるのに次につながらないという真反対に見えてもそれぞれに課題があり驚きました。観光名所があればそれでいいと考えていましたが、アクセスや宿泊施設の課題は大きいと感じました。しかし、どの地域でも言えることですが、単にホテルや電車を増やすことを考えれば、それによって潰されていくものもあるかもしれません。「いかに長所を育て、短所を補っていくのか」ということが課題だと感じました。



第5回授業(11月6日)

「両学部の専門の学びと地域の関係性」

本学の両学部の全学科、コースの教員からその専門の学びと地域の関係性について学びました。大学全体で「地域」を軸に、自分の関心と重なる内容は何かを考えました。

第2回授業(10月9日)

「地域課題」を知り、身近な地域に関心を持つ

今日の日本の「地域課題」について、また地域が置かれている状況や背景について学習しました。具体的には商店街の空き店舗問題や、過疎化について考えたことをきっかけに、受講生自身が地域や地元の課題について考えました。

第4回授業(10月23日)

ゲスト講義(宇治市役所)



地域課題の具体的な現状を宇治市の行政担当者のゲストから学びました。また、講義で学んだことを活かして、「宇治市のふるさと納税」について課題解決提案を行いました。

●受講生コメント●

宇治市には、思った以上に文化的景観や遺産、宇治茶を使った様々な商品の販売など、魅力的な部分が多くあるので、それを生かしたイベントを増やすことが良いと考えました。そのためには多くの資金が必要ですが、例えば、今行われている「宇治ふるさとプレゼント」のペア招待券を家族招待券に変更して、より多くの観光客を集めるという方法が効果的ではないでしょうか。多くの方が訪れているということで注目を集められるかもしれないと考えました。

●受講生コメント●

総合社会学部、臨床心理学部のそれぞれの地域との関わり方を聞きましたが、今までは、なんで臨床で教育に関わる学科にいるのに、地域について学ばなければならないのかと疑問に感じていましたが、今回の話を聞いて、自分も地域とは深く関わっていかねばならない、どんな人でも、地域との関わりを疎かにしてはいけないのではないかという考え方に変わりました。

第6回授業(11月20日)

「京都文教大学カリキュラムと地域での学び」

本学のカリキュラムの中から、特に地域との関わりが深い「現場実践教育科目」(プロジェクト科目、インターンシップ、ボランティア演習など)について、既に受講した先輩学生から体験したこと、感じたことを語ってもらい、今後履修する「現場実践教育科目」のイメージを考えました。

●受講生コメント●

実際に先輩方からお話を聞いて、今までぼんやりしていた科目のイメージがはっきりしたように感じました。私自身、大学に入って少し落ち着いた今、「何かしなければ」と考えつつ、何をすればよいかわからないという部分があったので、2年生からのことを考える参考になる貴重なお話を聞かせていただいたと思います。「1年生の半ばだし、まだ大丈夫」と今後のことを先延ばしにしていたところもあるので、一度しっかり考え直そうと痛感しました。

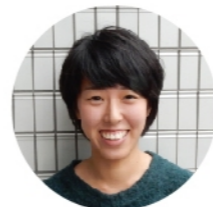


第8回授業(12月4日)

「地域志向の学びをデザインする」

これまで7回の授業を通じて学んだことのリフレクションを行いました。また、その内容をふまえて、2年次以降の「地域」に関わるどんな科目を受講したいか、今後の学びをデザインしました。

【SAからのコメント】



塚本 彩子
(総合社会学部3回生)

今回初めてSAを経験し、初めは450人の受講生に圧倒され緊張と不安でいっぱいでした。毎回、先生方とフィールドリサーチオフィスの職員の方とSA6名で授業前や反省会で講義が円滑に進むよう話し合います。さらに、講義が終われば受講生から講義に対して提案が出てくることもあります。この講義に関わる人全員でこの「地域入門」という講義を作っているのだと知り、受講生は多いですがとてもアットホームだと感じました。また講義の回数を重ねるにつれ、疑問点や先生には少し聞きにくい質問など、受講生は私達に気軽に質問をしてくれるようになり、お互いの緊張も和らぎました。

この8回のSAの経験は、私にとって大きな一歩であり、受講生もこの講義が地域と繋がるきっかけになれば良いと思います。

地域入門の教育評価について

「地域入門」では、当該回の授業における到達目標(「今日のゴール」)が示され、学生の主体的な学びを支援するツールとして「ワークシート」が活用されました。学生は毎回、グループワークや個人ワークの成果を「ワークシート」に記入し、自身の思考のプロセスを記録していきます。担当教員は、提出された「ワークシート」に評価点を与え、これが成績評価上の平常点(70%)の中心となりますが、その際、必ず一言以上のコメントを付し、400名を超える受講生全員にフィードバックしています。

学期末課題(30%)では、授業で得られた知見をもとに、(1)自身の思考の過程を改めて振り返る「リフレクションシート」、(2)2年次以降の「地域志向の学び」についてシミュレートする「カリキュラム・デザインシート」、(3)それらを踏まえた将来像や現時点でのライフ・キャリアについて構想する「レポート」を作成します。

第7回授業(11月27日)

「先輩たちは地域で何を学び、どのようにそれを活かしているのか」

地域と関わる課外活動の中で本学の学生はどのように活動しているのかを先輩学生から聞きました。また、本学を卒業し、地域で働く先輩たちから学生時代の学び、仕事に就いたきっかけ、今のお仕事と地域との関わり合いなどについてお話を聞きました。

●受講生コメント●

地域は人がいるからこそ「地域」だと感じました。今日話を聞いたどの方も地域の中で、地域の人のつながりやぬくもりを感じてお仕事をされていることがわかりました。現在、私は課外の地域での活動で、楽しさや難しさも感じているのですが、今日学んだことを生かし、私自身も「地域」のつながりを感じられるよう活動していきたいです。



地域協働研究教育センター専任研究員 木田竜太郎

すなわち、

- ①これまでの授業によって「地域」についてどのような考えをもつようになったか
- ②今後の大学生活における「学び」の中でどのように「地域」と関わるか
- ③大学を出た後に社会人としてどのように「地域」と向き合うか

以上の三点が問われることになるのです。

「ワークシート」と学期末課題は全て返却され、ラーニング・ポートフォリオの一部となります。「地域入門」のみならず、今後の大学生活における「学び」の指針となることを願っての課題設定であり、折にふれて読み返し、その時々自身の立ち位置を確認しつつ、自らの「歩み」について振り返る「よすが」となるよう期待しています。

(株)典座 × 京都文教短期大学 食物栄養学科
による「ともいきヘルシーランチ」



子ども記者も
「ともフェス」取材!



【小学生わくわく体験】

「平成27年度地域志向教育研究 ともいき研究助成事業」で、子育て・教育支援に取組む2つの研究会(※)が主催し「小学生わくわく体験」を実施しました。本学臨床心理学部教育福祉心理学科の先生方と学生たちが4つの体験コーナーを展開。教員を目指す学生にとって実践の場になったとともに、参加者の方には算数や科学、読み聞かせや工作を楽しく体験いただき、学校とは違った学びに触れる機会とすることができました。

※「親子で楽しむおもしろさんすうとおはなしのせかい」(研究代表者: 亀岡正睦教授)、

「まきま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造 —地域と結びつく親子の絆づくり、子どもへの学習支援—」(研究代表者: 寺田博幸教授)

子どもからご年配の方まで、“ともいきいき” 地域交流イベント ともいき(共生)フェスティバル2015 開催

2015年11月28日(土)に実施しました。

昨年に続き、2度目となる大学開放イベント「ともいき(共生)フェスティバル2015」を2015年11月28日(土)に開催しました。当日は見事な秋晴れの下、約2200名の方にご来場いただき、会場は大賑わいとなりました。

地元の小・中学生や障がい者の方々、連携自治体、京都文教大学生・短期大学生・卒業生・教員などによるステージ発表あり、模擬店や企画・体験ブースあり、子ども向けの企画や誰でも参加できる講座・ワークショップありと昨年よりさらに盛りだくさんの内容で、老若男女様々な人が笑顔で学内を行き交っていました。

地域の方、行政、大学が協働して作り上げた「ともいき(共生)フェスティバル2015」。大学と地域が共に生か合い、ともいきいきする「ともいき(共生)キャンパス」の実現に一歩近づけたイベントとなりました。



京都文教短期大学幼児教育学科の岩佐ゼミ生による打楽器演奏。会場が心地よい音色に包まれました。



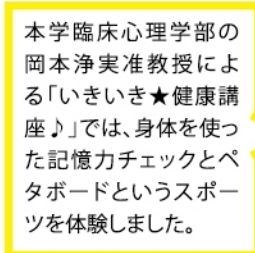
地域連携学生プロジェクト「商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas」は、活動拠点の宇治橋通り商店街に因んだクイズやゲームを展開。子どもたちに大人気でした。



京都府からの委託事業である第4回・第5回の「宇治茶文化講座2015」も開催され、のべ140名の方が講義に聞き入りました。



新企画「子ども野球教室」では、11月に西日本大学軟式野球選手権大会で見事優勝を果たした本学軟式野球部が小学生たちに野球を教えました。初心者から地域の少年野球団に所属している子まで、約60名の子もたちが経験・ポジション別に分かれて練習を行いました。グラウンドには始終楽しそうな声が響いていました。



本学臨床心理学部の岡本浄美准教授による「いきいき★健康講座」では、身体を使った記憶力チェックとペタボードというスポーツを体験しました。



ワークショップ「地域の魅力を考える」を開催。参加者の方と「地域の特産物」等をキーワードに地域の魅力について意見交換を行いました。



宇治市主催「高校生グループ対抗魅力発信動画コンテスト」の審査会と表彰式を開催し、最優秀賞・優秀賞の他、当日参加の一般投票による「ともいき審査員賞」が送られました。



地域連携学生プロジェクト「宇治☆茶レンジャー」は、参加者と一緒に宇治茶を美味しく淹れるワークショップを行いました。



宇治の小中学生から募集した宇治にまつわる問題を〇×クイズで出題する「ふるさと宇治検定」。どちらが正解かな!?



多世代交流ステージの進行は松田美枝地域協働研究教育センター員と、2015年夏に発足したばかりの「学生放送局SHERPA(シェルパ)」の学生が行いました。

手作り工作遊びコーナー

担当: 寺田博幸(教育福祉心理学科 教授)

「手作り工作遊びコーナー」では、輪ゴム鉄砲的あて、紙ブーメラン制作、ブンブンごま遊び、けん玉遊びの4つのコーナーを設定しました。どのコーナーも保護者と子どもで熱気にあふれる盛況ぶり。けん玉遊びコーナーでは、けん玉名人の学生スタッフをしのぐ小学生チャンピオンも誕生し、スタッフ一同、苦笑する場面となりました。親子で競うゴム鉄砲的あてコーナーでは、子どもに挑戦する保護者の真剣な眼差しに驚かされることの連続でした。保護者の真剣な眼差しを子どもは、どのように感じたのでしょうか。親子で楽しむ姿を引き出した学生スタッフ一同に感謝の一言です。



わくわく科学たいけんコーナー

担当: 大前暁政(教育福祉心理学科 准教授)

めずらしい海の生き物が見つかり大歓声此起彼伏、紙コップが人間の言葉をしゃべることに驚いたり、空気砲のドーナツ型のリングが理科教室の端から端まで飛んでいくことに興奮したり、葉脈の美しさに感動したり。子どもたちは、全てのブースを回って楽しんでいました。生物や物理の不思議など、様々な科学の不思議に触れ、大喜びでした。「とても楽しかった!」「またやってください!」「あつという間に時間が過ぎていました!」と保護者からも好意的な感想が寄せられ、保護者も夢中になって楽しむ場面も見られました。理科研究室の学生12名は、準備や当日の運営をしっかりとやってくれました。



算数で遊ぼうコーナー

担当: 亀岡正睦(教育福祉心理学科 教授)

「算数で遊ぼう」ブースでは、算数ゼミの3回生が楽しい図形と数の世界へ子どもたちを招待しました。内容は、①カライドサイクルをつくらう。②マッチ棒パズルに挑戦。③面白コマづくり。④輪ゴムでこの形が作れるかな?⑤パターンブロックで遊ぼう。⑥タングラムに挑戦。⑦紙ヘリコプターで何秒かはかる。コーナー等々、普段COC事業で学生たちが近隣の小学校へ「放課後学び教室」などで工夫して出前実演している内容を紹介します。保護者の方も興味を持って一緒に楽しまれ、カライドサイクル等のできた作品を嬉しそうに持って帰られる姿も見受けられました。



紙芝居・読み聞かせコーナー

担当: 山本早苗(教育福祉心理学科 准教授)

「紙芝居・読み聞かせコーナー」では、学生が大型絵本を使って読み聞かせをしたり、名作の紙芝居を演じたりしました。日頃から練習通り、聞き手を引きつけるように気持ちを込めて読むようにしました。担当をしていた学生全員が子どもたちを相手に演じることができて良かったです。また宇治市の学校読み聞かせボランティアの地域の方も実演してくださいました。同じ教室で体験する物作りや遊びコーナーに比べて参加人数は少なかったのですが、大型絵本に食い入るようにして聞いている幼児の姿が印象的でした。



会場からの声



・学生さんも出展者も「いきいき」なっていて、今日会った人も前からのお友達のように会話ができ、楽しく過ごせました。
・大学の方々と大学外の方が協力し合ってひとつのものをじっくりだそうという雰囲気良かった。
・とても楽しめました。また来年も楽しみにしています。



・年齢問わず楽しめる。学生さんの頑張りが素晴らしい。
・障がい者も気軽に入れて良かった。